

## 講演

### 「記憶の継承」一次世代に引き継ぐ資料館を目指して」

志賀 賢治

広島平和記念資料館館長

ただいまご紹介いただきました広島平和記念資料館の志賀でございます。

今日は、ご覧のタイトル「記憶の継承」と題しまして、当館について簡単にご報告させていただきたいと思っております。多分に私の悩みを聞いていただくというお話の内容になろうかと思いますが、当館の置かれている現状を踏まえまして、ご容赦いただきたいと思います。



さて、当館は被爆の実相、すなわち 1945 年 8 月 6 日にこの広島はキノコ雲の下で何が起きていたのか、それをお伝えするという使命をもちまして 62 年間頑張ってきてまいりました。当館は、8 月 6 日の出来事を、被爆した資料、物に語らしめることによって伝えてきたわけです。

今日のお話ですが、当館の歴史、それからその間に生まれた課題、さらに、その課題を踏まえて今後この資料館がどうあるべきか、そういうことを考えてみたいと思っております。



まず歴史です。ご覧いただいております写真ですが、赤い円の中にある人物は当館の初代館長です。



提供：佐々木雄一郎

彼が 8 月 7 日、被爆の翌日から集め始めた資料が目の前に並んでおります。これは 1949 年ごろだと思いますが、広島市にあります公民館の一室を借りての展示風景です。



提供：福島志津子

これも彼が集めた資料です。繰り返します。8月7日、被爆の翌日から集めた資料です。

1955年、現在の資料館ができました。真ん中の建物ですね。両側はもう既に、今はございません。



当時の展示風景を少しご覧いただきます。



ご覧のとおり、何の愛想もない、単に資料が並べられてある、そんな展示です。ごろんと床に資料が並べてあったような展示でしたが、むしろそのほうが鬼気迫るものがあると言う方もいらっしゃると思います。



アラン・レネ監督・仏「Hiroshima mon mour」からスチル写真



提供：長岡省吾



提供：長岡省吾



撮影：佐々木雄一郎  
提供：塩浦雄悟



提供：長岡省吾

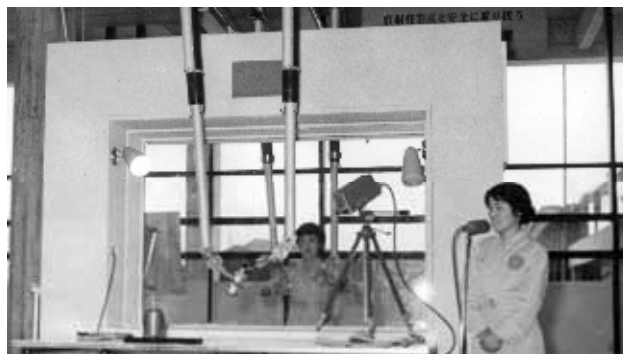
1955年8月24日が当館の開館ですが、その1年後の5月27日からご覧の博覧会が当館の中で行われております。日本語では、原子力平和利用博覧会。英語では、"Atoms for Peace Exhibition"。

この時、当館の中にございました被爆した資料は、一時的に元の公民館に移設されます。そして館の中は、ご覧のような原子力の未来を語る展示が行われております。



アラン・レネ監督、仏映画「Hiroshima mon amour」からスチル写真

人気があったのはマジックハンド。機械式アームで放射性物質を操作するものですね。左端に原子力飛行機なる模型が展示されてございました。これはマジックハンドです。



提供：福島志津子

実は、この博覧会は1カ月ほどして終わります。移設されていた資料は館に戻ります。ですから、ご覧になってお分かりになるように、原子力平和利用博で使われていた資料と戻された被爆資料が同時に展示されます。つまり、お越しになった方は、被爆した資料をご覧いただいた後、原子力の未来を語るという展示をご覧になります。



提供：長岡省吾

戦争で使う、兵器として使うと原子力というのはこんなひどいことをもたらす。しかし、平和、民生利用すると、こんな未来が開ける。そんな展示であったのではないかと推測します。こういう展示が1967年まで続きます。

当時の館内の様子を撮影した動画がございます。少しご覧ください。

<動画再生・終了>

被爆した資料と原子力の未来を語る資料が同時に



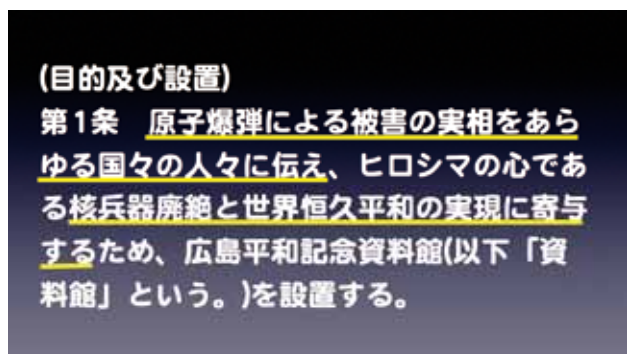
展示されていたのがお分かりと思います。

今の映画はフランスの映画です。アラン・レネ (Alain Resnais) という監督が1959年に発表しました。先ほどご覧いただいた館内の様子は、1958年の秋に撮影されたものです。その当時、こういった展示がまごうことなく行われていたということです。最近、ブルーレイのきれいな画像で再発売されたようです。

これが現在の当館ですね。その後、東館と呼ばれる建物を増築しまして、今は2館体制で展示を行っております。従来ありました真ん中の建物、1955年の建築物は、現在、国の重要文化財に指定されております。

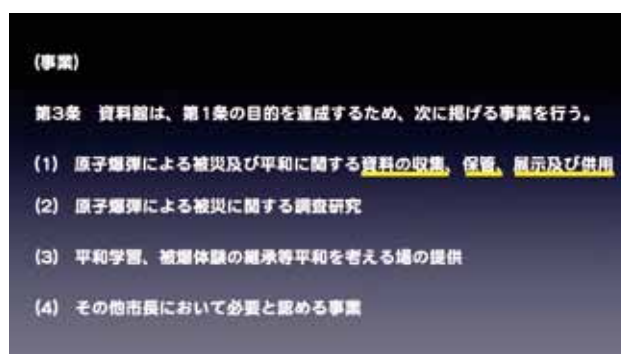
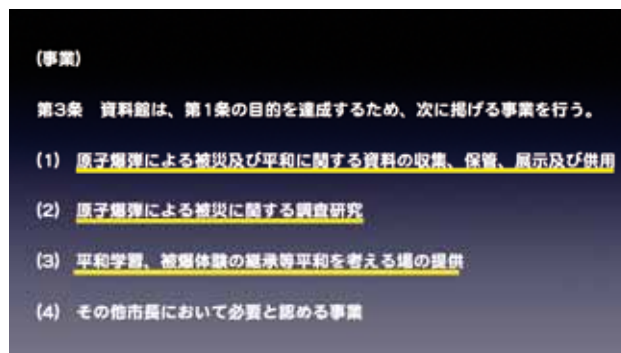


さて、課題です。どのような課題があるかです。その前に、当館の設立根拠となります広島市の条例をご覧ください。広島平和記念資料館の設置目的です。「原子爆弾による被害の実相をあらゆる国々の人々に伝え、これが一つ。「核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に寄与す」、これが二つ目です。



この二つの設置目的を実現するために、ご覧の事

業を行います。まず、原子爆弾による被災及び平和に関する資料の収集・保管・展示、それから供用ですね。二つ目です。原子爆弾による被災に関する調査研究。三つ目、平和学習、被爆体験の継承等、平和を考える場の提供。この三つが当館の事業とされております。



一つ一つにつきまして課題をご説明致します。

まず、資料の収集・保管・展示・供用です。

収集の課題がございます。今からご覧いただく写真は、赤いアンダーラインを致しましたが整理番号が付いておりますように、これはある公的な組織が持っていたものです。





それはアメリカの公文書館であり、議会図書館であり、空軍・海軍の博物館です。結構田舎にあるそうですが、われわれは過去2年間にわたってアメリカに赴いて収集をしてきております。今年も職員を派遣します。

そのほかにも、さまざまな研究者、あるいは軍関係者、ジャーナリストといった方たちが広島を訪れ、さまざまな資料を各地にお持ち帰りになっている。それを今のうちに、つまり散逸する前に、少し語弊がありますが取り戻したい。そして、広島でいったい何が起きていたのかを研究していきたい。これが今、われわ

れが取り組んでいる収集に関する事業です。

そのためには、どこにあるのかを研究しまして資料を入手していきたい。どうやらロシアにも資料が存在するということが最近分かりまして、調査の機会を窺っています。

次に劣化防止です。これが一番、頭が痛いございます。

今ご覧いただいておりますのは、当館にございませう懐中時計です。ご覧のとおり、8時15分で止まっております。大変有名な時計で、当館の図録をはじめ、さまざまところで使われております。



少し余談になりますが、8月6日を前にして、閉館後、職員全員で館内の一斉清掃をしたところ、この時計の短針、8時を指した針が折れているのが見つかりました。拡大します。短針が見事に折れております。





これは、おそらく金属が腐食したことに伴うものと思われています。発見したのは、ちょうど被爆70年の一昨年です。70年たったのだからということで劣化度の激しさに愕然としたわけですが、その時によく思い当たりました。この時計が72年前にどんな目に遭ったのか。数千度の熱線を浴びて、とてつもない爆風に吹き飛ばされて、すさまじい放射線にさらされているわけです。そういう意味では、70年ではない、もっと長い経年劣化を考えておくべきだったのではないかと、今更ながら感じております。

そういう物理的な資料だけではございません。たくさんの被爆後の光景を撮影したフィルムをお預かりしております。その幾つかは、こういう状態です。最新のケースに入れておいたのですが、こういう状態になってきております。もう現像することはできません。こういった資料の劣化防止も急務でございます。



<動画再生>

ちょっとご覧ください。当館がどれだけの資料をどうにかたちで保存しているか、動画を撮ってまいりました。

これは当館の地下にあります収蔵庫です。温度は20度、湿度は50%に24時間365日しております。ご覧のとおり、アクリルのケースに一つ一つ資料を収めています。

この資料は和紙で包んで大事に保管しております。もちろん、一つ一つの資料にはシリアルコードが振ってございますので記録にたどり着けます。そういう保管の仕方をしております。

今ご覧いただいておりますのは、渡辺玲子という女子学生が持っていた弁当箱です。弁当箱に名前が書いてあったので、親元に弁当箱だけ戻ってきました。遺体はいまだに戻ってきておりません。

ここは少し趣が違います。ご覧のとおり木のたんすです。これは繊維系の資料を収めております。虫を嫌いますので、中には桐のたんすを置きまして、その中に衣類、革製品、あるいは紙といったものを収めております。ご覧いただくとお分かりのように、もういっぱいです。こうした資料を保管しておりますが、この資料にも劣化の危機が迫っております。

<動画終了>

また別の資料をご紹介します。



これは被爆者が、自分が見た光景を自分で絵にしたものです。ですから下手くそです。ですが、ご覧



のとおり、すさまじい光景が記載してあります。こういった絵を約 5,000 枚、われわれは保管しております。いまだに絵は届けられてまいります。

ご覧ください。上部が欠けております。画材は、とても粗末なものです。

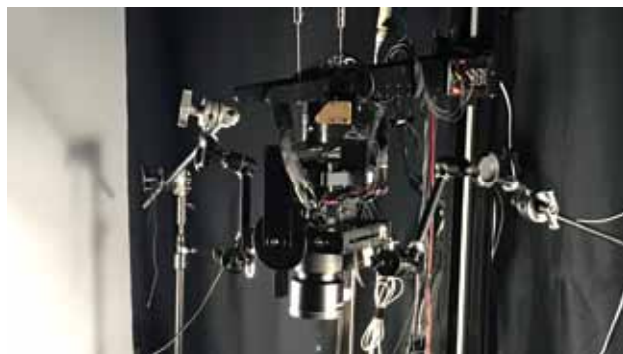


新聞広告の裏に孫から取り上げたクレヨンか何かで書いたような絵もございますが、まさにあの日の光景、いつまでも消えなかった光景を描き刻んでおります。そういう絵をわれわれは 5,000 枚持っております。



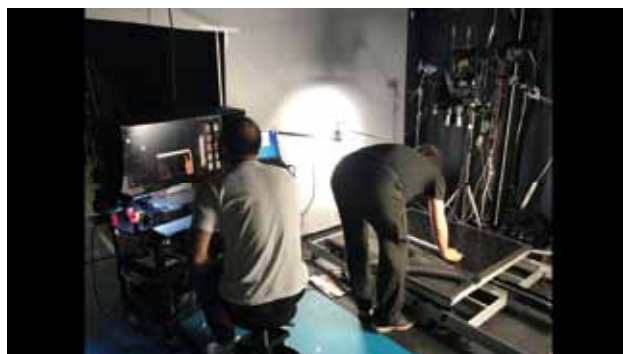
劣化対策の確立が急務だということを申し上げた上で、最近取り組みました劣化対策の一つをご紹介します。

今ご覧いただいておりますのは、NHKが持っています 8K スーパーハイビジョンというカメラ。



極めて高性能で、現在、皆さんがご覧になっているテレビの 16 倍かな。数字は苦手ですが、とにかくとても解像だと思ってください。このカメラを使いまして、先ほどご覧いただきました原爆の絵を全てデジタルアーカイブに致しました。

これは作業風景です。1枚1枚ずっと撮影しまして、1カ月以上かかりました。





これをNHKさんの番組に取り上げていただいていますので、近々、皆さんもご覧いただけると思いますし、現在、館内で100インチのモニターを持ち込んで上映会をしておりますので、ご覧いただけるかと思えます。極めて高精細です。

そのスーパーハイビジョンの動画を見ながら思ったのは、すごく丁寧に描いてある。下手くそですが丁寧に描いてある。それに感動した次第です。

それからもう一つ行っていますのは動画ですね。われわれは16ミリのフィルムをお預かりしております。その動画をデジタルリマスター、きれいにするとともにデジタル化しました。今ご覧いただいているのは紙屋町の電車です。



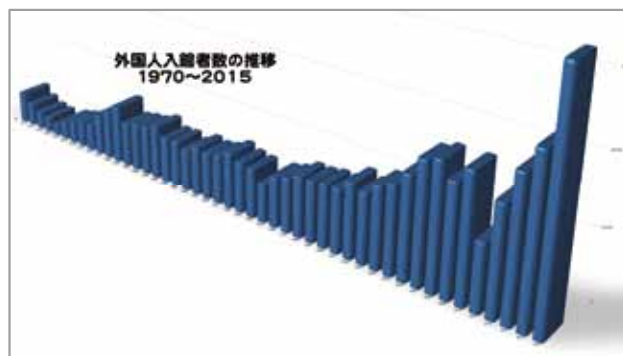
川崎源次郎撮影、映像からスチル写真

その前に映っていましたのは、平和公園の光景だったと思います。こういったかたちで、デジタル化というのが一つの劣化対策のキーワードになるのではないかと考えております。

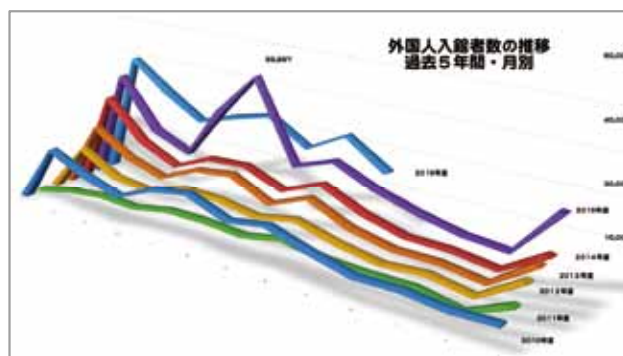
また、展示の問題です。展示の問題で頭を痛めておりますのは、ぜいたくな悩みと言えるかもしれま

せんが、来館者が大変急増しております。昨年は170万人を突破しました。私どものような小さな施設で、とてもそれだけのお客さまをお迎えする余裕はないのですが、ここ数年、急激に伸びております。上が総入館者、下の黄緑色が外国のお客さまです。お分かりのように、外国のお客さまの増加が総入館者を押し上げております。

課題は、外国からのお客さまの増加です。



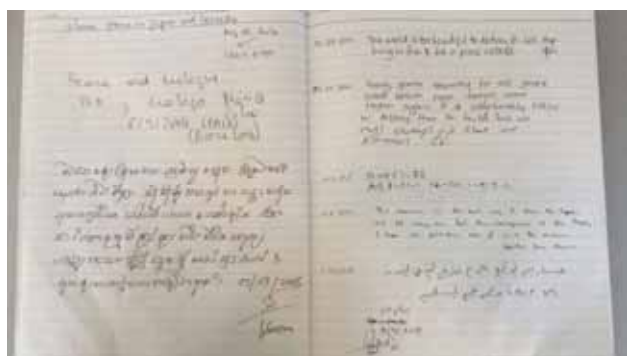
1970年に外国のお客さまの入館者統計を取り始めて、ここ数年。一時期ぽこんとへこんでいるのは2011年です。福島の3・11の時ですね。その翌年は急に取り戻して、昨年度は最高の来館者数に達しました。月別の数字も整理しております。ご覧のとおり、特に7月に入ると急にお客さまが増えまして、8月にまた増えてと、外国からの来館者も増えております。



さて、何が課題かという就多言語化です。どのような方が来られるのか。館内にノートを置いて感想を書いていただいています。ダイアログノートと呼んでおりますが、ここにたくさん書き込みがござい



ます。この書き込みをご覧いただいても、私どもが見慣れぬ文字がたくさんございます。これほど、たくさんの方からお越しになっている。



われわれも手をこまねているわけではございません。ご覧のように 17 言語の音声ガイドを用意してご提供しておりました。



過去形で申します。実は今、館内は改装工事ですので、現在言語は二つだけ、日・英の音声ガイドしか提供しておりませんが、完成後は 17 言語に戻す予定です。

その音声ガイドでどういう言語が一番聞かれているか。この 5 年間の利用状況を作りました。赤字が中国語です。この数字を見て、中国からのお客さまがこれほど多いのかというのは驚きました。だいたい増えておりますのは黄色です。英語とドイツ語、それからイタリア語、スペイン語、こういったヨーロッパからのお客さまが急速に増えてきている。英語のものも用意しましたので、こちらもご覧ください。そういう状況です。

実は、この数字はあまり当てになりません。とい

うのが、音声ガイドの機械そのものが耐用年数を過ぎて次々と壊れておりまして、それを使い回しているものですから、ボランティアガイドの方は皆さんいらっしゃるのでお分かりですが、だいたい貸し出し中というのでお貸しできない状態がずっと続いています。そろそろ新しい機械を替えなければならないと思いますが、300 台を切る機械を使い回しているのが現状です。

さて、これからの言語の取り組みですが、今ご覧いただいているのは、新しく開館した東館と呼ばれる展示室の言語です。縦書きに日本語ですね。横書きで一番上に英語、二番目に大陸系の簡体字、それからハングル。さらに 17 言語でタッチパネル式のモニターを使いまして、そのコーナーごとに要約した説明をしております。





Zagreb, 2013



Zagreb, 2013

なぜならば、展示の説明はスペースの関係上、日・英でしか無理です。コーナーごとに、このパネルにこういう説明を加えています。この言語数は16言語プラス手話です。これで今後の館の多言語化は確保していきたいと思っておりますが、悩みは尽きません。翻訳の質です。7月26日にこれをご皆さんにご覧いただけるようにして以降、ここが違っている、あそこが違うと言語ごとに苦情を頂いております。あれほど念入りなチェックをしたのにというため息しか出ておりません。

次です。被爆体験等の継承、それから平和を考える場の提供という事業ですが、最大の課題は海外の原爆展の問題です。われわれは年に2回、海外で原爆展をしています。

これは5年前にクロアチアのザグレブで行ったものです。ご覧のとおり、当館から送った資料をその地のキュレーターが極めて工夫を凝らした展示をしてくれています。



Zagreb, 2013

こちらはスペインですね。



Granollers, 2015



昨年はシカゴです。



それから、被爆 70 年の年はワシントン D.C. のアメリカン大学で行いました。大変な数のお客さまをお迎えすることができました。



現在は、ブダペストで展覧会をやっております。オープニングの様です。こちらもそうですが、送った資料が被爆した台所用品だったものですから、日本の台所を、少し工夫した和だんすのようなしつらえをして展示していただいています。







おまけに、こういったコンテンポラリーアートも展示しています。これは黒い雨を表現したのですが、この原爆の絵をモチーフにコンテンポラリーアーティストが展示をしているようです。そういったいろいろな工夫をした展示をしていただいているということを申し上げたかった。これが一つ。

課題は何だったのかというと、どこでやろうかという課題ですね。やはり展示環境というものがないので、博物館探し、美術館探しに大変苦労しております。

すみません、つい時間が超過してしまいましたので、いきなり資料館の今後へまいります。悩みは、また機会があったら聞いていただきます。

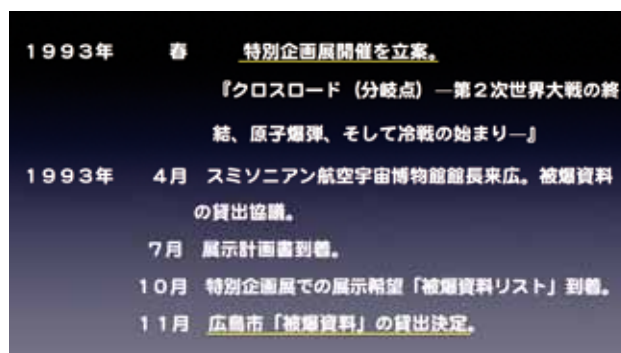
申し上げるまでもなく、昨年5月27日、オバマ前大統領に来ていただきました。その時にわれわれが何を考えたかということを上げて結びとさせていただきます。

1995年、20年前にスミソニアン国立航空宇宙博物館と当館が共同で展覧会をしようとした。

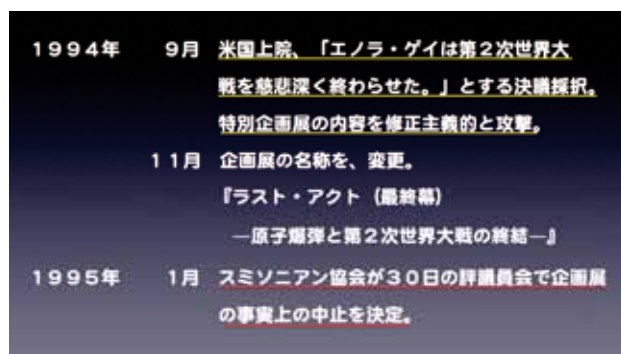
「クロスロード」というタイトルです。



こちらはできませんでした。英語のタイトルもご覧いただこうと思います。「クロスロード」という展覧会、企画展をワシントンD.C.のスミソニアン国立航空宇宙博物館が企画して、当館に資料を貸してほしいという申し入れがありました。ドラフトを読みまして、これは極めて客観的であるという判断の下に資料を提供することを決定しました。



しかし、その翌年、米国上院が反対の決議を致します。原爆の正当化論を否定するというものだったようです。スミソニアンの評議委員会も中止を決定します。これが1995年、20年前の出来事です。

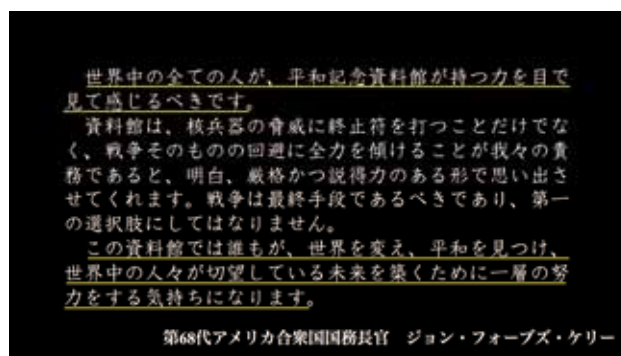


これが現在もワシントンに展示されているエノラ・ゲイです。



エノラ・ゲイとエノラ・ゲイがもたらした被爆の実相を同時に展示するという企画が頓挫したわけですが、結局、そこでその時、広島キノコ雲の下で何が起きていたのかをアメリカの皆さんはご覧になる機会を逸したわけです。見る必要はないという決定を政府がされたと言うと、ちょっと言い過ぎかもしれません。

先ほど申し上げた海外の原爆展というのは、「この野郎」というのでわれわれが始めました。それで20年間、見てくれないのなら持ち込むぞということで海外でやってきたわけですが、21年たった時、彼が広島に来て、キノコ雲の下の出来事を見てくださった。これはわれわれとしては、アメリカの皆さんが当館へお越しになるハードルを下げてくれたというふうに受け止めました。



それと同時に、われわれは、できるだけ原爆の投下というものを歴史トータルの中で捉えるように、学術的、客観的と言っていいと思いますが、そういう展示を心掛けてまいりました。トリップアドバイザーという口コミサイトには、バランスの取れた展

示だという評価をよく書き込んでいただいているので、それは自信を持っていいと自負していた次第です。オバマ氏が来てくださったということは、ある意味、博物館としてきちんとした展示をしていると認めていただいたというふうに、われわれは勝手に自負しております。

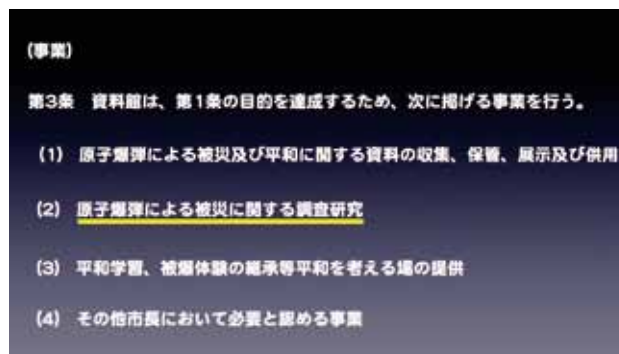


いつの日か、証人としての被爆者の声を聞くことがかなわなくなる日が来ます。けれども1945年8月6日の朝の記憶が薄れるようなことがあってはなりません。

「平和記念公園におけるバラク・オバマ大統領の演説」  
米国大使館Webサイト

そういう意味で、われわれは原爆がなぜ落とされたのか、広島に何をもたらしたのか、そういったことを今後とも学術的な成果を基に展示していきたいと考えております。

さて、一つ飛ばしました事業目的です。調査研究です。この調査研究をもっと進めていかなければいけないという宿題を、われわれは頂いたと思っております。そのためには、活動を強化しなければいけないのですが、学術機関との連携・支援を重視していきたいと思っております。



同時に、同じテーマを持った博物館が世界中にたくさんございます。今、映っておりますのはアウシュビッツ・ビルケナウ（Auschwitz-Birkenau State Museum）ですね。





先々月にお伺いしまして、副館長とお話をしました。同じ悩みを抱えているねということで実は意見が一致しまして、今後とも情報交換していこうではないかとお話した次第です。

9~10月はアメリカへまいります。ご覧のミズーリ・メモリアル (Battleship Missouri Memorial)、アリゾナ・メモリアル (USS Arizona Memorial) とともに情報交換をしてみようと思っています。画像がなかったので出していないのですが、セプテンバー11 (National September 11 Memorial & Museum) にもお伺いしようと思っています。

なぜかという、結局、被爆者という当事者に、ある意味われわれ資料館は支えられて今まで運営してまいりました。しかし、そういった当事者が亡き後のことを考えたときに、やはり学術に立脚した展示というものをわれわれは重要視していきたいと考えております。さらに9月の中旬にアリゾナへ行きます。

それから、頼まれたものですから、これだけは言わせてください。ご覧の会議が2019年、京都で行われます。



これは世界の博物館の関係者が集まります。この会議の分科会、委員会と呼んでいます。ICMEMOという委員会を広島でやってくれ、手伝ってくれという申し入れを実行委員会から頂いています。これは結局、われわれと同じようなメモリアルをテーマにした博物館の集まりです。こうした機会を通して博物館同士の連携を確立していきたいと考えて

おります。

少し慌てまして、いよいよ雑ばくな話になりましたが、私の報告はこれで終わらせていただきます。時間を超過して申し訳ございませんでした。以上で終わります。